

ある日の暮方の事である。一人の下人<sup>げにん</sup>が、羅生門<sup>らしやうもん</sup>の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗<sup>にぬり</sup>の剥<sup>は</sup>げた、大きな円柱<sup>まるばしら</sup>に、蟋蟀<sup>きりぎりす</sup>が一匹とまつている。羅生門<sup>らしやうもん</sup>が、朱雀大路<sup>すざくおおじ</sup>にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠<sup>いちめがさ</sup>や揉烏帽子<sup>もみえぼし</sup>が、もう二三人はありそうなるものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風<sup>つじかぜ</sup>とか火事とか饑饉<sup>うき</sup>とか云う災<sup>わざ</sup>がつづいて起った。そこで洛中<sup>らくちゆう</sup>のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎<sup>うちくず</sup>いて、その丹<sup>に</sup>がついたり、金銀の箔<sup>はく</sup>がついたりした木を、路<sup>みち</sup>ばたにつみ重ねて、薪<sup>たぎ</sup>の料<sup>りょう</sup>に売っていたと云う事である。洛中<sup>らくちゆう</sup>がその始末であるから、羅生門<sup>らしやうもん</sup>の修理などは、元より誰も捨てて顧<sup>かへ</sup>る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸<sup>こり</sup>が棲<sup>す</sup>む。盗人<sup>ぬすびと</sup>が棲<sup>す</sup>む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪<sup>わる</sup>るが、この門の近所へは足<sup>あし</sup>ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代りまた鴉<sup>からす</sup>がどこからか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉<sup>からす</sup>が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾<sup>しび</sup>のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、

夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉カラスは、勿論、門の上にある死人の肉を、啄つばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限こくげんが遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖あおの尻しりを据えて、右の頬ほに出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申まをの刻下こくがりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日あすの暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる

雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した藁の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる違はない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつていた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを

見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄ひじりかの太刀たちが鞘走さやばしらないように気をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺つていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿うみを持つた面皰にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くつていた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛くもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいちにしながら、頸のどを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、棲の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸<sup>しがい</sup>が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏<sup>こ</sup>ねて造った人形のように、口を開<sup>あ</sup>いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくらがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾<sup>わし</sup>の如く黙っていた。

下人<sup>げにん</sup>は、それらの死骸の腐爛<sup>ふらん</sup>した臭気に思わず、鼻を掩<sup>おお</sup>った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲<sup>うすくま</sup>っている人間を見た。檜皮色<sup>ひわだいろ</sup>の着物を着た、背の低い、瘦<sup>や</sup>せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片<sup>きぎれ</sup>を持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時<sup>ざんじ</sup>は呼吸<sup>いき</sup>をするのさえ忘れてい

た。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しらみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死うえじにをするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きざれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であつた。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる氣でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄<sup>りづか</sup>の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩<sup>いしゆみ</sup>にでも弾<sup>はじ</sup>かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手<sup>みちづ</sup>を塞いで、こう罵<sup>のの</sup>った。老婆は、それでも下人をつきのけて行くこうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかつている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ<sup>ね</sup>倒した。丁度、鶏<sup>にわとり</sup>の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘<sup>さや</sup>を払って、白い鋼<sup>はがね</sup>の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼<sup>めだま</sup>が眶<sup>まぶた</sup>の外へ出そうになるほど、見開いて、唾<sup>しゅ</sup>のように執拗<sup>しゅうね</sup>く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、い

つの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かしした。細い喉で、尖った喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいって来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつubyくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。



「成程な、死人しびとの髪かみの毛けを抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここに  
 いる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、  
 髪かみを抜いた女などはな、蛇へびを四寸しすんばかりずつに切つて干したのを、干魚ほしうおだと云うて、太刀  
 帯わきの陣じんへ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかつて死ななんだら、今でも売りに往いんでいた事であ  
 る。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯わきどもが、欠かさず菜料さいりょうに  
 買つていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、餓死がしをする  
 のじゃやて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思  
 わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死がしをするじゃやて、仕方がなくする事じゃわいの。  
 じゃやて、その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしのする事も大目に見て  
 くれるであろ。」

老婆は、大体こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀さやを鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、こ  
 の話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬ほに膿うみを持った大きな面砲にきびを気にしながら、  
 聞きいてるのである。しかし、これを聞きいている中に、下人の心には、ある勇氣ゆうきが生まれ  
 て來た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさ  
 つきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうと

する勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲にきびから離して、老婆の襟上えりがみをつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己おれが引剥ひはぎをしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色ひわだいろの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行つた。そうして、そこから、短い白髪しらがを倒さがにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々こくどうどうたる夜があるばかりである。

下人の行方<sup>ゆくえ</sup>は、誰も知らない。

（大正四年九月）



## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年10月29日公開

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。